

人類進化と文化の形成

—現代人間学考2—

中 野 毅

はじめに

現代における人間学は、自然科学を含む諸学問の総合的学際的な研究と教育を探求する必要があるのではないかと前号で考察した(中野, 2010)。自然科学の中でも筆者が関心を寄せているのは、動物学、とりわけ進化生物学や考古学などの進化に関する研究や、脳科学、認知科学、言語学、遺伝子学等であるが、本稿では生物進化に関する近年の成果、およびそれを基礎とした社会生物学の考察をもとに、人間はどのような経過で、また何故、文化を持ったのか、そこから人間にとって文化とは何であるのかという問題を考えていきたい。

これら現代科学の知見によれば、人間はなによりも動物であり、哺乳類の一種である。人間は聖書に説かれるように神による7日間の天地創造によって創り出されたのでも、コーランが説くような神の一滴の凝血から生まれたのでもなく、約46億年前に地球が誕生してからの途方もなく長い生命進化の果ての最後の一瞬に、質的に巨大な進化を遂げて誕生した¹。最も近い仲間は類人猿チンパンジーである。しかし、人間の遺伝子構造の98.4%がチンパンジーと同じであり、ゴリラやオランウータンよりも、チンパンジーは人間に近いという。人間の特徴は、通常自ら認めているよりも、はるかに動物としての遺伝によるところが大きい。このような事実から、イギリスの動物

学者デズモンド・モリスが、1967年に人類を「裸の猿」(naked ape)と呼んだ時、世間から轟々たる批判を受けた(モリス, 1996: 6-7, 66-67)。しかしまた、遺伝子構造の1.6%しか違わないチンパンジーと人間は、身体上の特徴や知的能力などの面で大きく異なっているのも事実である。そして何よりも、人間は複雑で高度な文化を発展させることによって、彼らと決定的に異なる存在へと飛躍した。文化を持ち、発展させたことで、動物としてのヒトは人間(human being)になったのである。

まずは、この進化の過程を概観していくことにしたい。

1. ホモ・サピエンス(ヒト)の誕生

約137億年前に宇宙が誕生し、46億年前頃に惑星・地球が誕生した。それ以来、地球上の陸地や海、大気の度重なる大きな変動を経ながら、徐々に生物が誕生し、進化してきた。5-20億年前に南半球にあった巨大なゴンドワナ大陸が北上して現在のアフリカ大陸になり、1億2000万年前には、アフリカ大陸と南米大陸が分離した。約5000万年前には現在の南極大陸から分離した三角形の巨大な大地が北上してユーラシア大陸と衝突してインド亜大陸となるとともに、その衝撃でヒマラヤ山脈が隆起し始めた。

4000万年前頃からアフリカ大陸と現在のアラビア半島を引き裂くような地殻変動によって紅海地溝帯が形成され始め、アフリカ東部の大地溝帯が生まれていく。なお、紅海とインド洋がつながったのは、かなり後の520-164万年前の頃であるという(福井・赤坂・大塚, 1999: 11-12)。2200万年前頃には南アメリカ大陸とアフリカ大陸がさらに大きく分離し、大西洋が生まれる。この分離で、共通の祖先を持っていた旧世界サルと新世界サルが分化して別々の進化過程を歩み始めた(フェイガン, 1990)。旧世界ではヒマラヤ山脈の隆起が続き、700万年前頃には5000メートル級の巨大な尾根を築くようになった。その結果、ユーラシア大陸中部から南下する気流がヒマラヤで乾燥し、それが中東からアフリカ大陸にかけての一体を乾燥させることになった。同

じ頃、アフリカの大地溝帯が大きく隆起し、活発な火山活動によって高い山々もでき、地溝帯東部の乾燥化が進んでサバンナが形成されていった。また断層活動による陥没も激しく、河川や湖に富んだ起伏の激しい地形が形成されていった(三井, 2005: 33. 文末図1, 2)。

ちょうどこの700万年前頃、場所もアフリカ大地溝帯にそった地域で、類人猿と猿人²の分岐が起こり、ヒトへの進化過程が始まった。大地溝帯から西の地帯には森林が残り、隆起した大地溝帯領域とその東部は低い木々と草原のサバンナ地帯となったことが、この分岐の原因とも考えられている。遺伝子学の研究によると、ヒトとチンパンジーのミトコンドリア染色体のDNA分析の結果、類人猿と猿人の分岐が起こったのは約500-700万年前であり、ヒトの間での分岐が起こったのは30-15万年前であるという(カヴァーリ=スフォルツァ, 1995: 77, 113-124. 三井, 2005: 112-119. 文末図2)。

遺伝子学による説を裏付ける人類学者による発掘調査も、1990年代に急速に進展した。東京大学の諏訪元らがエチオピアで発掘し、1994年に発表したラミダス猿人(アルディピテクス・ラミダス)は440万年前のものであり、チンパンジーらと分岐した直後の人類化石として、当時世界中の注目を集めた(植原, 2004: 48)。その後も発掘競争は続き、2002年にはフランスの研究チームが700-600万年前の最古の人類「サヘラントロプス・チャデンシス」の完全な頭骨を発見した。脳容量は360-370mlとチンパンジーなみで、分岐直後の化石であることが注目されたが、それだけでなく発見地がアフリカ中央部のチャドだったことから、人類は当時アフリカの幅広い地域で生存したことを示していた(三井2005: 269)。その後も、ツゲネンシス(600-580万年前)、カダハ(580-520万年前)、アナメンシス(420-390万年前)などの猿人の化石が次々と発見されていったが、これらはケニアやエチオピアなどアフリカ東部で見つかっており、進化地が大地溝帯周辺の湖沼地帯に集中していたことが示されている。またこの段階ではヨチヨチ歩きで、完全な二足歩行ではなかったようである。

360万年前頃に生息していたと見られるアフール猿人(アウストラピテク

ス・アファーレンシス)の化石が、1974年に発見されたが、ヒトとしての特徴がはっきりと現れてきた。最初に発見された個体は保存状態が良く、頭骨のほか、ほぼ全身が分かる遺骨が出土した。女性であったの「ルーシー」と名付けられたが、それは発掘していたアメリカ・フランスの調査隊のキャンプで当時流行していたビートルズの“Lucy in the sky with diamond”のレコードが鳴っていたからである。ルーシーは約320万年前のものと思われ、発見地はエチオピア北東部ハダール地方のウダ・ハダール川畔アファール低地であった。脳は400ml弱でチンパンジーと大差ないが、身長は1mとやや小柄であった。二足直立歩行の初期段階の特徴を示しており、初歩的な石器も使っていたらしい。アファール猿人が二足歩行をしていた痕跡は他にもあり、大地溝帯を奥地に遡ったタンザニアのラエトリで約360年前のものと思られる足跡化石が見つかっている。親子3人が歩いた痕跡が27mにも渡って続いていたのである(埴原, 49-57)。

現生人類への道のりは、まだまだ遠いが、250万年前頃にやっと人類につながる原人(ホモ族)が誕生する。「才能あるヒト」と名付けられたホモ・ハビリスである。タンザニア・オルドバイ渓谷やケニア・トルカナ湖東岸などで発見され、同時に剥片石器を作製して動物の肉体を処理し、肉食を開始した。その結果でもあるのか、脳が700mlへと巨大化している。この段階で「道具を作るための道具」を製作するなど行動が複雑になり、初歩的言語も発達してコミュニケーション能力が飛躍的に発達した。集団内での知識や考え方の共有が高まり、それらを次世代に伝達することが可能になるなど、「文化」を形成しだしたことによって進化速度が急上昇していった(埴原, 88-90)。

サルから猿人へ、そして原人への進化が起こった場所は、アフリカ東部の大地溝帯の周囲である。進化を遂げた人類の祖先が、いよいよアフリカを出て、世界へと歩み出す段階がきた。170万年前に東アフリカで生存したと考えられるホモ・エレクトス(直立するヒト)である。このタイプの化石が最初に発見されたのはジャワ原人(110-70万年前)としてであり、北京原人(80-23万年前)として発見された化石も同種のものであった(埴原, 94)。彼らの最

大の特徴は、火の起こし方と利用法を獲得したことである。その結果、多様な食材を調理して食べることができるようになった。また深い洞窟の奥で火を灯して居住できるようになり、炉辺が家族生活や集団活動の中心となり、夜でも行動が可能になった。他の動物からの襲撃を防ぐためにも有効であった。人類の夜更かし癖は、このころから始まっていたのである（フェイガン, 1990: 79-82）。移動範囲と行動時間が飛躍的に増大したと考えられる。こうして50万年前頃には冷涼な気候にも適応できるようになり、東アジアの北京周辺にまで移住していったのである（フェイガン, 80-81. 埴原, 94-118）。

その後も様々な進化による分岐が続いたが、約30万年前、ついにわれわれ現生人類（ホモ・サピエンス・サピエンス）の祖先が誕生した。ホモ・サピエンス・アルカイコ（智恵あるヒト）を経て誕生したネアンデルタール人（ホモ・サピエンス・ネアンデルタレンシス）である。優秀な狩猟採集民であって、ヨーロッパを中心に熱帯、温帯の広い範囲に適応して生存した（文末図4）。人口は最大時で50万人ほどに達したと推測されている。そればかりではない。脳の大きさは1400mlに達し、抽象的思考が大きく発達して、超自然的なものや死後の世界を考えた最初の人類と言われている。イラク北部のティグリス川上流の山中にあるシャニダール溪谷の洞窟で発見されたシャニダール4号人骨は、明らかに土を掘り下げて「埋葬」されており、さらに遺骨の周辺からは花の破片と花粉の化石が多数見つかった。仲間を埋葬し、何種類もの花々を野山から摘んで帰り、死者に供えて埋葬儀式を行ったと見られている。この人骨は「花と共に埋葬された最初の人類」と称されたが、死を悼み、死後のための埋葬品を飾る葬送儀礼の始まりとも考えられる（赤澤, 2000: 227-234）。ネアンデルタール人の埋葬の跡はほかに幾つか発見されており、さらにアナグマを石板の櫃に丁寧に埋葬した遺跡も発見されている。アニミズム（精霊崇拜）の原初形態とも言え、超自然的世界についての観念があった証拠である（埴原, 209-210）。

4万年ほど前には、彼らは分布地を広げてヨーロッパから中央アジアへと拡がっていった。その間、ヨーロッパなどでは次に誕生する新人と共存して

いたと考えられるが、3万年前頃には死滅している。その後の氷河期という気候の激変に適応できなかったか、進出してきた新人に駆逐されたか、消滅した原因はいまだ不明である。

約20万年前、ついに現代人の直接の祖先ホモ・サピエンス・サピエンス（新人、現生人類とも称する）が、やはり東アフリカ大地溝帯で誕生した。脳はネアンデルタール人とほぼ同じ1400ml前後であるが、発音能力に優れて音声言語が著しく発達し、高いコミュニケーション能力を駆使して、集団での狩りや共同生活に優れていたと考えられる。埋葬の痕跡も増え、さらにフランスやスペインの大西洋岸で多くの洞窟壁画を遺すなど、芸術的行為を行い、文化レベルは飛躍的に高度化した。彼らは、次第に南極大陸を除く地球上のすべての大陸に移住を果たしていく。近東からアジアへ、そして海路、オーストラリア大陸へと進出し、一部は獲物を追ってシベリアと東北アジアに達して、モンゴリアン種として繁栄した。極めて多様な気候・環境の下で生存することができるようになったのである。

25,000年から15,000年前にかけての大氷河期時代に、シベリアとアラスカが氷河で覆われて繋がったが、このベーリンジア陸橋と呼ばれる回廊を、東北アジアの新人の一部は獲物を求めて移動していったと考えられている。こうして最初のアメリカ人が生まれた。彼らは15,000年前頃にはアラスカに到達し、カナダのエドモントン近郊では11,500年前の化石が発見されて、クロヴィス人と呼ばれている。中国型歯列を持った後期旧石器狩猟採集民と分類される彼らは、やがて氷河期が終わって草原が広がってくるに従って新大陸を急速に南下し、1000年ほどで南米の端へ到達したという（フェイガン、120-128, 259-260。文末図5）。

2. 現生人類の特徴：類人猿との違いは何か

現在の科学的研究の主流をなすアフリカ単一起源説をもとに、人類誕生の過程を概観してきた。気の遠くなるような長い進化の過程をへて、現生人類

は誕生したのである。では、人類に最も近い仲間といわれるチンパンジーなどの類人猿との、生物学的な違いを多くの考古学者や人類学者の見解をもとに整理してみたい。箇条書きにしてみると下記のようなになるだろう。

地球上で最も繁殖した動物。現在、人間の総数は69億を超え³、一日25万人増加。

二足直立歩行。両手の発達。無毛。霊長類の中で最大の脳とペニスを持つ。

道具を使用し、かつ道具を作成する道具を発明。

火の利用法を獲得。明かりを灯し、安全と暖房をも確保。煮炊きする(調理)ことで、食物の範囲が拡大。夜更かしになる。

衣服を作り、住居を建てる。気候や環境の変化に大きく対応することが可能に。

群れる。集団生活をし、共同体を形成。集団で「狩りをするサル」(スタンフォード)。

旺盛で豊かな食生活：肉食と草食・海藻などあらゆるものを食べる。雑食。調理。

水を恐れない。水と遊び、泳ぎ、潜る。

旺盛な好奇心を持ち、探検好き。

豊かな身振りと言葉、豊かな顔の表情。騒々しくて、おしゃべり。シンボル操作、言語の高度な発達。コミュニケーション能力の高度化。芸術的活動の展開。宗教的世界の創造。

遺伝子構造で1.6%しか異ならないチンパンジーとの間で、このように大きな違いが認められる。ましてや、それ以外の動物との間では、もっと差があることは言うまでもない。それぞれの項目を詳細に論じることは省くが、いくつか重要な点を考察する。

最初の2行に、動物としての外見上の特徴を記したが、なによりも哺乳類の中で最も高い繁殖力をもって人口が幾何級数的に増加しているのが人類で

ある⁴。

外見上の特徴で次に重要なのは、完全な直立二足歩行をすることである。この特徴がサルとヒトとの決定的な分岐点と捉えられている。320 万年前のアファール猿人の頃には、完全かどうかは別として、二足歩行が常態となっていたことは確実である。しかし、どのような契機で、または原因で二足歩行に移行したかは未だ確定していない。従来の定説は、アフリカ東部の隆起に伴って森林がサバンナ化した時に、樹上生活から陸上生活を余儀なくされたためであるという「サバンナ説」であったが、近年は幾つかの異論が出ている。

筆者が説得力があって面白いと考えているのは、女流の人類学者エレイン・モーガンの「アクア説」である（モーガン, 1999）。この説はアクアが水を意味するとおり、人類の祖先は極めて長い期間、水辺または水につきりながらの生活を送っていたのではないかというものである。類人猿から分岐したばかりの猿人が陸上生活を始めた場合の危険性は、個体としてはまだ非力で小さな動物であるために、陸上では大きな肉食獣の獲物になりやすいことである。水辺に生活することで、襲われた場合に水中に逃げるのが容易となる。水中で長い時間を過ごすためには、頭部を水面上に出して呼吸しなければならないので、必然的に直立しなければならない。まして水中では陸上よりも浮力の関係で直立しやすい。このような点から、モーガンは直立生活を促す契機が水中生活にあったのではないかと推測している。

このアクア説から、モーガンは他の動物との身体上の大きな相違である「無毛」の理由も説明している。チンパンジーなどとの外見上の大きな相違の一つが人類は無毛、または体毛が極端に薄い点である。似たような動物はカバやイルカなど哺乳類にも見られるが、それらは皆、水辺または水中での生活を営んでいる。水中で自在に行動するためには体毛は邪魔になるため、徐々に無くなってきたことが原因ではないかというのである。

ヒトは確かに他の陸上動物と異なって、水を恐れないし、泳いだり、潜水をし、魚をしたり、水中で遊んだりする。こうした特徴の原因を説明するこ

とは容易ではない。ヒトの生存には大量の水分が欠かせない。水中で魚や貝、水草などの食料も容易に得ることができる。そして実際に、ヒトの祖先の多くの化石が大地溝帯の河畔や湖畔で発見されているのである。筆者としては、このアクア説は説得力のあるものと考えているが、学界では異端説として退けられているという。

次に注目すべき点は、ヒトは大規模な集団生活を送ることである。この特徴も動物としては小さな個体であり、非力であることによる。直立二足歩行は、四足歩行の動物より走る速度は遅く、単独や少数では生きられない。旺盛な食欲を満たす食糧の確保も必要となり、狩りや採取、栽培などに集団で対処する必要がある等々の理由から、猿人としての早い段階から集団生活を送っていたと考えられる。集団生活で重要なのは個体間の緊密なコミュニケーションであり、そのため身振りやゼスチャー、言語が飛躍的に発達した。ある特定の身振りや音声に、特定の意味を付与して、意志を伝えあう行為は、シンボル（象徴）を駆使する能力であり、それが極めて高度かつ複雑な体系として発達したものが言語のシステムである。この言語を発達させたことで、人類は高度な文化と意識や心を発達させることができ、他の動物には見られない独特の主観的意味世界に生きる存在となっていった。この点については、後に詳しく述べる。

言語と並んで、ある意味ではそれ以上に重要で独特な現生人類の特徴は、芸術的表象文化を発展させたことである。絵画による美術表現であり、楽器による音楽表現の誕生である（三井, 136-138）。絵画は人類最古の洞窟壁画がフランス南東部のショーベ洞窟で見つかっている。年代は約3万年前である。有名なものはフランスのドルドーニュ川上流ヴェゼール溪谷で発見されたラスコー洞窟の壁画群やスペイン北部海岸のサンタンデル近郊のアルタミラ洞窟の天井画である。年代は17,000年から12,000年前であるという。これらは通称クロマニヨン人と呼ばれる後期旧石器時代人が遺した最初期の芸術で

ある。そこには跳躍する馬や牛、ビゾンやマンモスなどの動物たちの姿とともに、抽象的な線刻画や顔のない人間、鳥の頭部と羽をまとった呪術師のような者などが描かれていた。彼らが何を意図して、それらを描いたかは知る由もない。小さく非力な裸のサル同様の先人が、制御できない自然の中で力強く躍動し、繁殖する動物たちを畏敬の念で眺め、そこに神秘的で圧倒的な生命の力を感じたのかもしれない。また、それらの動物たちは彼ら狩猟民の食料でもあった。動物たちの繁殖の度合いと捕獲量は生存に直接大きく影響した。洞窟壁画は、自分たちの生命を支えてくれる動物たちが、豊かに永く繁殖し、たくさん捕獲できるようにとの豊饒への祈りや願いの表現であったかもしれない。

しかし少なくとも、この段題で人類が、自然の対象物を抽象化してとらえ、イメージとして記憶し、さらに、その記憶を特定の場所に描く行為をしていたのは確かである。描く行為は単なる模写ではない。そこには描く人間による動物や自然などに対する理解や意味、願望が投影される。言いかえれば、その段階で、人類は自然環境に直接的に適応して生きる動物から決別し、自然や現実をさまざまな形象や記号などのシンボル（象徴）によってとらえ、それらのシンボルを自分なりに解釈し意味を与えて、自然的世界と異なる「主観的な意味の世界」を生みだし、その中で生きる存在となったことを示している。カッシーラーの言う「シンボルを操る動物」(animal symbolicum)の誕生である。

3. 人間と文化

これまで人類学や進化生物学の成果をもとに、現生人類(ヒト)の生物学的特徴を検討し、そこから人類が文化を生み出した要因を考察してきた。本節では、人間と文化との関係についての諸学説を検討していく。

(1) 文化は「第二の自然」

現代の人間学を考える上で出発点となるのはアルノルト・ゲーレン (Arnold Gehlen, 1904-76)⁵である。生物学や心理学などの科学的成果を取り入れた哲学的人間学を提唱したゲーレンによれば、動物と人間は共に一定の自然条件の下で生存している。そして動物は各々独特の「生態学的状況」、つまり「環境」を利用しきって生きている。環境への適応が遺伝子情報として組み込まれ、本能的行為として行われるのである。身体も、その動物独特の環境に適応する形態になっており、特定の環境に対して、有機的に特殊化し固定化した態度をとる。動物は、それがそこに「はめ込まれている」諸条件の組織、つまり「環境」の中で、「適応」して「自己を保存する」のである (ゲーレン, 1999: 26, 139)。

それに対し人間は、自然環境に単純に「適応」して生きているのではない。生物形態学から見れば、むしろ人間には一定の自然環境に適応する上で必要な特殊器官 (体毛や甲殻などの保護器官や牙などの攻撃器官等々) が欠けており、動物一般に見られる機械的な適応本能が欠けていると考えざるを得ない。その意味では人間はヘルダーの言うように本能の機能としては「欠陥生物」であるという。その代わりに、人間の頭脳は特殊化の極限に達しており、人間は頭脳を駆使して、未来を予見し、計画に基づいて現実を変化させる「行為」を遂行することができる。この「意識的な」行為によって、変化させられた、ないしは新たに作られた事実と、それに必要な手段との総体が「文化」である。人間は行為によって自然環境を変化させ、人為的に「形成された自然」の圏、すなわち文化圏の中に生きるのである (同前, 32, 36-38, 91, 125)。

「文化圏」とは……人間によって変更を加えられた自然の圏であり、人間が世界のうちに作りこんだ巣のようなものである。それが生存に必要なのであるは、人間には環境に対する動物並みの生まれつきの適応力が欠けているからである。したがって、未開民族の文化はまず第一に武器・道具・小屋・家畜・畑等であって、これらはすべて変更を加え、加工し、貴重化した自然、知的行為により新たに形成された自

然で、この自然が自然自体の構造を変えるための手がかりや技術的手段を自分から提供している。「新たに形成された自然」のうちには家族や結婚も入るし、社会秩序もまたこれに属する。……最後に、また神話や宗教のなかで、謎を解き明かそうとする人間精神（の働き）もこの例外ではない（97）。

ゲーレンは、およそ文化の存しない人間社会、すなわち人間のために計って現実の事実や事態を予見に基づいて変更することが行われなような人間社会はないと強調する（16-19）。文化は人間の自然的生存条件の一つであり、文化を創造することが人間をすべての動物から区分する特徴である（23, 26）。人間は欠陥生物であるが故に、どんな自然環境の中でもそのままでは生存不能である。だからこそ、人間は「第二の自然」、すなわち技術的に加工され、適合的にされた代償世界が必要であり、人間はいわば技術的に解毒され、人間にとって手頃なされ、人間の生存に役立つように作り変えられた自然の中に生きていくことによって、むしろいかなる自然環境の下でも生存できる能力を獲得したのである。「環境」は転移できないが、「文化」はどこにでも持ち運ぶことができるからである。この「第二の自然」こそ、まさに文化領域にはかならず、文化は人間の自然的生存条件の一つであるとともに、人間は生物学的に自然支配を強いられている存在なのである（142-3）。

この人間が生み出した「第二の自然」が「文化」であるという捉え方に類似した文化理論を、当時興隆しつつあった人類学（Anthropology）において展開したのは、ブロンスラウ・マリノフスキー（Bronislaw Kasper Malinowski, 1884-1942）⁶である。マリノフスキーはゲーレン同様、文化の理論は、生物学的事実を基礎にしなければならないこと、さらに人間の基本的欲求を充足する機能を果たすメカニズム・装置が「文化」であり、人間はそのために生み出した製作品の全装備、製作品を生産し、その価値を認める能力からなる「二次的環境」を創造すると主張した（マリノフスキー、1975: 42-44）。

個々の人間や種族の持つ有機的または基本的要求を充足することは、明らかに、あらゆる文化に課せられた最小限の条件である。栄養摂取・生殖・衛生の面における人間の要求から生ずる問題が解決されなければならない。それらの問題は、新しい二次的な、つまり人為的な環境を作り上げることによって解決される。この環境—これが文化そのものに他ならない—は、絶えず再生産され、維持され、運営されなければならない (同前, 43)。

文化は人間の作り出したものであり、人間が自己の目的を達成するのに利用する媒体であること、人間的に生きること、安全・安楽・繁栄の水準を可能にする媒体、人間に力を与え、動物的有機的な天賦の能力をこえて財と価値を創造することを可能にする媒体であること、それゆえ文化は、目的に対する手段として、つまり手段的機能的に理解されなければならない (76)。

彼は、個々の文化が相互に密接に関連して統一的全体をなすことをも主張して、後の構造機能主義理論への糸口を示したが、本稿で重視するのは、文化は人間の基本的ならびに派生的欲求を充足するための装置であり、手段である、換言すれば、文化とは巨大な条件づけの装置 (conditioning apparatus) であるという主張である。この文化的行為による人間の欲求の充足が「機能」であると論じたことで、彼の理論は (心理的) 機能主義とも称される。

以下は、人間の基本的欲求を7つにまとめ、それに対する文化を定式化したものである。

《7つの基本的欲求と文化反応》 (同前, 101)

A 基本的欲求

新陳代謝 (metabolism)

生殖 (reproduction)

B 文化的反応

給養 (commissariat)

親族関係 (kinship)

身体の保全 (bodily comfort)	身体の庇護 (shelter)
安全 (safety)	防護 (protection)
運動 (movement)	行為 (activities)
成長 (growth)	訓練 (training)
健康 (health)	衛生 (hygiene)

(2) 人間文化の特殊性－象徴・言語・意味・世界

人間文化を「第二の自然」と捉える文化概念においても、動物と人間との生存の仕方に大きな違いがあることは明らかである。しかし、身体を保全し、食料や住居を確保するなどの実際的な手段としての文化は、動物の自然適応の延長にあるとも言える。またこの概念は一方では広すぎて、「文化」と「社会」とが区分されてなく、社会学的に見ると社会組織や社会制度という複数の個人による集団形成の特徴を論じることが困難である。他方、それら社会組織と異なる、人間文化のより重要な特徴が明示し切れていないといえる。それは例えば、次のような疑問として表現できる。

- ①なぜ、人間は意識（対象意識・自己意識）を持ちえたか？
- ②なぜ、こんなにお喋りなのか？言語や文字の発展、文学などが、なぜこんなにも発達したのか？
- ③なぜ道具や芸術品を、そして超越的世界を想像・創造しえたのか？

本節では、このような疑問を考察することで、人間文化の独自性、特殊性に迫り、そこから人間の存在様式の独特のあり方を明らかにしていく。この課題には、近年、大きく発展した脳科学の成果を取り入れた研究が急速かつ広範に取り組んでいるが、まずは従来の研究においてどのように考えられてきたかを整理してみたい。

①意識を持った存在＝主観的世界に生きる

a. 意識

人間の「文化」をまずは「第二の自然」と呼んだゲーレンにおいても、文化を創造する行為が本能的に行われるものでないことは前提とされ、「第二の自然」も、人間が「意識的に」構築した「世界」であると理解されていた。

人間がその場その場で見いだした自然条件を予見と計画を持って変更することが人間の自然的生存条件である。……しかし、計画を立てる能力とは、その場その場で見いだした任意の個々のものを「表象」によって時間的空間的に移しかえ、また表象によってそれの上に他のものを重置する事ができることを意味する。こうして蛮人は樹木のうちに将来のボートを見、回教徒には、どこにしようといつも東にメッカがある。山の背後には見えていなくても村のあることを人は知っており、……(ゲーレン, 32)

意識論が人間学の核心部分である(同前, 116)。

身体を保全するための住居(動物においては巣)を作る場合、動物は一定の時期に、一定の材料で、一定の形態の巣を作るが、人間は地形や気候などのさまざまな自然条件とその未来の変化などを予見をもって検討し、また材料も自然物を必要に応じて変形・変質させて活用して、自分たちの目的と必要に応じた形態の住居を作り上げる。その場合の予見や計画は、まさに頭脳の中で、つまり「意識」においてイメージや形象、図形や計算式でもって考えていく。

それだけでなく、人間は常に自分を中心とする空間的座標軸の中に、関係する人物や風景などを配置し、記憶している。生まれ落ちた直後から認知するのは母親であり、その背後にいる父親を、そして兄弟や親族等々、重要で近い関係者から、成長するにつれて友人や先生、はては自国や他国の人々や科学者、政治家へと、その地図は同心円的に拡大していく。時には、この宇宙の果てまでもイメージするように、合ったことも見たこともない存在までも、その座標軸に位置づけて把握していく。空間的座標軸だけではない、

本稿のように宇宙誕生から現代に至る時間軸を、さらには未来永劫への時間軸をもイメージしていく。生まれる前の世界や死後の世界までも視野に入れている。

社会学でマッピング（地図化）（バーガー、1995: 99-100）と呼ぶ作業が、幼少の頃から絶え間なく行われ、空間的・時間的で4次元的な座標軸の中に、場合によってはそれ以上の高次元の座標軸の中に、人間は生きている。それは決して物理的世界ではなく、まさに主観的な「意識の世界」である。この知覚と想像、そして記憶によって形成された主観的「世界」(world)、主観的「現実」(reality)に、われわれ人間は生きているのである。

b. 「対象への意識」と「自己意識」

この意識は、通常は「外界の対象」に向かっており、身体内部の生命活動は精妙な均衡を維持しつつ没意識的に行われている。しかし時として、身体内部の一部の臓器に障害が起ると、警告や危険を知らせる痛み等が感じられ、「意識下」に置かれる。また日常的にも、空腹や性欲のような人間の衝動や欲求や関心は人間自身に内的に自覚され、しかもそれを充足する対象なり状況なりの心像や形象に包まれて意識化される。意識の対象が身体内部や自己自身という「内的な対象」にも向かうのである。この場合、空腹時には皿が眼前に浮かび、名誉心が強いものには勲章が浮かぶなど、衝動はそれの充たされた状況の心像や形象、つまり外界の像をまとった姿で体験されるなど、独特な様式で意識化される。したがって、これを「内なる外界」とも呼ぶ（ゲーレン、589）。

この意識下に置かれた衝動や欲求は、しかし同時に、抑制と統制の下にも置かれ、予見と状況認識によって妥当な行為へと変換されていく。時には、その欲求が阻止されることもある。「意識の世界」は、知覚された外界の単なる表象だけでなく、人間の計画性や予見性、状況判断と、さらに道徳的倫理的判断・意志も支配する世界である。このような反省的機能をもったことで、人間は他に見られない強い「自己意識」を有する存在なのである。

人間は自己自身をも対象化しうるのであり、「自己意識」を持つ。こうして、おのれ自身を対象化し、おのれに対して距離を保ち、おのれを阻害し、…うることは、やがてさらに進んで、おのれに対し「否」といい、おのれの衝動と傾動を阻止することができるようにし、人間を道徳的存在たることを可能にする(同前, 88)。

人間は外界を意識するだけでなく、自己自身をも対象化し、あたかも他人が見るように自己を見つめる能力をもつ。かつシカゴ学派の社会学者クーリーや人類学者クラックホーンが「鏡に映った自己」と表現したように、人間は自分の顔や姿を、実際に鏡に映して眺めることが好きな動物である。さらにクーリーは、人間の自我や自己意識は他者の評価や認識を通して、社会的に形成されると主張した。この立場は、後にG. H. ミードによって発展させられる。

いずれにせよ、人間は「自己意識をもつ存在」であることが、他の動物との大きな違いである。さらに上述のように、その意識は自己否定・自己抑制の働きももち、欲望や衝動を統制し阻止する力としても作用する。本能的規制が弱い「欠陥生物」ともいわれる人間は、意識によって自己を統制し、時には自己変革をめざす「人間革命」が可能な存在なのである。

これらの人間の特性から、ゲーレンは人間の存在様式の特徴は「意識性」「衝動の阻止可能性」「可塑性」「世界開放性」と整理した(32, 60-61)。人間という生物には「環境」はなく、外界と自己を意識下においた主観的な「世界」(world)がある。その世界は外界からの夥しい刺激や情報を選択して受け入れることで、その世界は無限に拡大するという意味で、人間は「世界開放的」な存在でもある。さらに、どのような自然的条件下でも生存しうる文化装置を創造し、また同時に、自己自身も変化させていくという意味で、他の動物を遙かに越える「可塑性」を有した存在であるのだ。

②言語の発達と機能

では、なぜ人間は「意識」を持ち得たのだろうか。その原因や理由の解明に、まさに近年の「脳科学」が大きく貢献しだしたことはいうまでもない。しかし、その前に、従来の社会心理学、構造言語学、文化人類学などによる解釈から考えてみたい。

a. 言語と反省的知能

社会心理学の領域で、人間の自己意識とその働きを、言語の獲得によって発達した「反省的知能」(reflective intelligence) との関連で重要性な研究を行ったのは、ジョージ・ハーバート・ミード (George Herbert Mead, 1863-1931)⁷ である。ミードは「音声身振り」から「有意味シンボル」へと発達した「言語」の獲得と使用によって、人間は「反省的知能」を強化し、外界を「世界」として意識し、内面世界を「自己意識」として発達させたと主張する。言語使用の結果として人間の社会的経験が獲得するこの反省的特質は、ミードにおける自我の社会的生成論にとって重要である (マーチンデル、1974: 390)。

われわれは、他人がわれわれを見るように、多少とも無意識に自分自身を眺めている。われわれは、他人がわれわれに話しかけるように、自分自身に語りかけている。……われわれは無意識に、いろいろな態度を取り入れており、他人の場所に自分自身を置いており、他人が行為するように行為している。……われわれは、ときに有声身振りの使用によって、たえず自分自身の中にわれわれが他の人々によびおこす反応を引き起こし、そうすることで、われわれは他の人々の諸態度を自分自身の行為の中にとりいれている。人間の経験の発達において、言語のもつ決定的な重要性は、言語刺激がそれを聞く人に作用すると同じように、それを話している人々にも作用するという事実にある (ミード、1973: 76)。

この自己自身を眺め、自分に語りかける行為は、上述の自己意識の形成につながる。ミードはそれを自我論として展開したが、重要なのは、自我は社会的に形成されるものであること、また自我には客体的自我・客我 (me) と主体的自我・主我 (I) の二側面があり、客我は親や兄弟、友人など他者の期待を受け入れることで形成され、主我はその客我を反省的に対象化しつつ形成されるものであるという点である。このようにミードは、自我の二重構造と、自我が他者やその総体としての社会との相互作用、コミュニケーションによって形成される過程を明らかにしたが⁸、この相互作用やコミュニケーションの媒体として決定的に重要なのが言語である。言語とは、特定の音声に意味が付加された「有意義シンボル」の体系であるが、基礎にあるのは音声による刺激であり、有声身振りである。個人は自分の言うことを聞くことができ、そして自分の言うことを聞きながら他人に期待する反応を、自分自身で反応する。音声は、それが向けられた相手に反応を引き起こすが、発している本人にも同様の反応を引き起こし、相手の反応と態度を自分自身の行為の中に取り込むのである。これが反省的機能の基礎である。

反省とは、自分自身の経験を自らの上に投げ返すことであり、その反省によって、一つの全体的社会過程がそこに内包される個人の経験の中に入り込む。このとき、個人は自意識的になり、一つの精神をもつに至る。反省するという性質は、社会過程の中で人間の「精神」が発展するうえで不可欠の条件であると、ミードは主張する。

b. 言語の構造

言語、およびその使用による反省的知能の発達は、人間が自己意識、自我、そして精神を形成する上で決定的な重要性をもつという主張は、言語、言葉とはいかなる構造や特徴をもつものなのか、またそれは人間にどのような働きを及ぼすのかという問題に、われわれを誘う。言語活動は、人類進化の過程で250万年前のホモ・ハビリスの段階で初歩的なものが始まっており、30万年前のネアンデルタール人ではかなり進んでいたと考えられている。言語

を獲得したことで、人類はヒトとなったのである。

言語とは音声言語と手話が基礎であり、書き言葉、すなわち文字は二次的
で、最初の文字は約 3500 年前にやっと発明されたようである。現在は、世
界で 5 千を越える言語が確認されている。人間の反応と動物の反射を分かっ
ものは、シンボルを用いた行動、象徴的行動であるが、その最も発達した「言
語」の出現が、その分岐を決定づけたという（マーチンデール：389-393）。

人間の社会生活は言語によって営まれ、言語は複雑な社会生活にとって不
可欠である。われわれは、すべてを言語化する。思考も言語によってなされ、
外界の刺激も言語化されて知覚され、記憶される。世界の認識もイメージに
よってなされる部分もあるが、その多くは言語化されて認識される。つまり
人間の主観的世界、意識化された世界は大半が言語に依っている。

この言語が、どのように発達してきたのか。身振りや有声身振り（唸りなど）
のような、動物の反射行動と近い行為から発達した等々の所説がある（コー
バリス 2008 年など）。またソシユールやその影響を受けたブラーグ学派によっ
て解明された構造言語学の成果も重要である（ソシユール, 1972. 橋本, 1988:
41-65）。言語の基本構造は、特定の音素の組み合わせ（シニフィアン）に特定
の意味が付与（シニフィエ）された「音声シンボル」である。その無数の組み
合わせが差異性をもとに恣意的に連鎖をなしているのが言語体系である。音
素の発見、二重文節、二項対立の原理、弁別特性など、言語の構造を明らか
にした重要な研究がなされている。

言語の恣意性を強調するその論の一方で、さまざまな言語体系における文
法の共通性・類似性から、文法構造が人間の脳における生物学基礎に依存す
るとのチョムスキーらの生成文法論も有力になってきた。そして、脳科学に
よる意識や心、知覚と言語、記憶との関係についての研究成果も大きく進展
している。

これらの問題についての考察は、紙数と時間の関係で、今回の論考で行い
たいと思う。

おわりに：人間はシンボル（象徴）を操る動物

構造言語学の成果は、言語の指示する対象は物質的な自然界のあり方とは独立しており、人間が言語によって勝手に区分し、切り取り、構成したものであることを明らかにした。言語は独自に「世界」を構成するのである。「世界」のあり方は言語に依存し、言語が異なれば世界の区切り方も異なってくる。言語の数だけ「世界」があることになる。さらに、物質的な対象のない事柄をも指し示すことができる。神や天国、来世など、物理的には知覚し得ない領域までも、人間の「世界」には広がっているのである。

言語のもう一つの重要な特性は、それがシンボルの体系であることにある。エルンスト・カッシーラー (Ernst Cassirer, 1874-1945)⁹は、言語を含む多数のシンボルの使用が人間文化の本質的特徴とみなし、人間はシンボルを操作する動物 (animal symbolicum) であると定義した。人間の知識は、本質的に象徴的であり、人間生活はシンボル体系の使用に基礎をおく新しい方法によって、動物の環境への適応と峻別される。普遍的適用性と融通性をもつ新しい象徴的知識の体系は、人間の意識を拡大し、無限に開放的なものとして人間生活の全体を変形し、人間をより広い現実の中に住むばかりでなく、新しい次元の現実 (reality) に住むことを可能にしたという。

人間の象徴的活動が台頭するに従って、物理的現実の後退するように思われる。……人間は固い事実の世界に、あるいはその直接的な必要や欲求に従って生活しているのではない。彼はむしろ想像的感情のただ中に、希望や恐怖の中に、幻想や幻滅の中に、空想や夢の中に生活しているのである (Cassirer, 1944: 246, マーチンデル, 393)。

シンボルを駆使する能力の獲得は、さらに関係的思考を可能にした。この関係性の認知こそ、人間の意識のもう一つの特徴と言える。幾何学の発明と発展は、その最も典型的な事例であり、人間の知的生活における偉大な転換

点の古典的例証である。それは現実世界を人間の主観的意識世界に、点と線、座標をもって取り込んだ。さらに数学と幾何学の結合は、曲線や流動する世界を数式で象徴的に把握することを可能にし、やはり人間の主観的世界に取り込まれた。人間は、空間的・時間的に、かつ多次元的に、無限に広がる主観的意味世界に住む、独特の生存様式をもつ動物なのである。

最後にもう一度、1万5000年前、われわれの祖先がラスコーの洞窟で描いた「世界」を思い起こしてみよう。それはすでに単なる事物の世界ではなく、神秘的な力や精霊に満ち、自然や人間を越える圧倒的な力や存在が跳躍する躍動的な世界であった。神話は、その「世界」の物語である。人類は、そうした「世界」の中で、自分たちの生存を支えてくれる力や存在への畏敬や感謝の念を抱き、時にはひれ伏し、祈り、願望の成就を願ったことであろう。また、そうした圧倒的な力や存在との一体化を願って、自分自身を越えようとしたことであろう。自己超越への希求である。こうして人類は、自己や自然を越える「聖なる世界」「宗教的な世界」を発見または創造し、その中で生きる道を見いだしていった。ラスコーにいたって人類は動物から、人間的な存在へと飛躍した。それは「芸術の始源」であるとともに、「宗教の始源」でもあった。

[注]

- 1 地球の誕生を仮に40億年前とし、その時間を一年に換算してみると、チンパンジーなど類人猿と人類の祖先である猿人とが分離した700万年前は、12月31日の午前8時半ごろになる。現生人類が誕生した20万年前は大晦日が終わる26分前となる。1万年前で1.3分前となり、一年が終わる直前の数分で人類の進化、特に文化的進化は驚異的な発展を遂げたことになる(三井, 2005: 61)。
- 2 人類やヒトなどの術語の定義は研究者によって若干異なるが、本論文では次のようにする。動物学上の分類では、人間は「哺乳綱霊長目ヒト科」に分類され、イヌやゾウなどを含む哺乳綱(類)というグループの中の、霊長目つまりサルの子孫の仲間の一群になる。従って、広い意味でのヒトはサル・類人猿と人類を含むし、狭い意味ではホモ・サピエンス、つまりネアンデルタール人と現代人の直接の祖先となるホモ・サピエンス・サピエンスを指す。後者は略して現生人類とも呼ぶ。本稿ではヒトという呼称は狭い意味で使用し、「人類」を類人猿と分岐した後の猿人、原人を含むも

のとする。猿人は無毛や直立歩行などが未発達な段階であり、原人は現代人の祖先へとつながるホモ族を指す(埴原, 25, 三井, 12-13)。

- 3 2010年10月国連推計。『世界人口白書』。Wikipedia: '世界人口' 参照。
- 4 人類に匹敵する繁殖力と数を有するのは、ゴキブリとネズミであるという説も聞くが、いかんせん正確な統計的データが存在しない。
- 5 ゲーレン (Arnold Gehlen, 1904-76) はドイツの哲学者であり、18世紀以降に急成長した諸科学の知見を哲学的に解釈して人間を捉え直す「哲学的人間学」(Philosophische Anthropologie) を唱道した代表的人物である。彼の立場は、カントやフィヒテ、シェーラーらによる思弁的形而上学的な人間学を越え、生物学や人類学、社会学、心理学など経験科学の成果を取り入れて、人間の精神と身体を動物として一元的に考察する生物学の人間学である。
- 6 マリノフスキー (Bronislaw Kasper Malinowski, 1884-1942) はポーランドで生まれ、当初、数学と物理学を学んだが、やがてフレーザーやヴントの影響を受けて文化人類学へと転身し、イギリスに渡って本格的な研究を始めて文化の機能主義理論を発展させた。当時、社会学の基盤を築いた E. デュルケムの機能主義理論が、人類学の領域においてモースやエルツ、レヴィ=ブリュール等によって継承され、さらにイギリスのラドクリフ=ブラウン (A. R. Radcliffe-Brown, 1881-1955) やマリノフスキーによる未開社会の現地調査をもとにした研究などによって、発展していった。

マリノフスキーは、1915年から180年にかけて、正味2年半にわたってニューギニア東北部のトロブリアンド諸島を中心に徹底した現地調査を行い、『西太平洋の遠洋航海者』(1922)などを著して、文化の機能主義理論の確立に貢献した。彼は、個々の文化が相互に密接に関連して統一的全体をなすこと、さらに文化は人間の基本的ならびに派生的欲求を充足するための装置であり、手段であると論じた。この文化的行為による人間の欲求の充足が、「機能」である。宗教と呪術はともに、希望の挫折、恐怖、不安、合理的計算をこえた出来事など、精神的に緊迫した状況や個人的破滅の恐怖から脱出する方法である。ただ、宗教は呪術より多様で創造的であり、その営み自体が目的充足となる。人間のわずかな知識の外側の暗い神秘的な世界に対処する手段であり、人間に優れた精神的態度、勇気と信念を与え、個人を心的に統合する重要な道徳的・社会的力である。他方、呪術は人間の実際的能力を補足し、統御不能な力などに直面した時、不安を鎮め、自信を強めさせるものであり、人間の楽観主義を儀式化したものである。

参考までに、マリノフスキーが機能主義を個人の心理的欲求充足の面から論じたのに対し、ラドクリフ=ブラウンは「社会構造」の維持機能と結びつけた社会学的機能主義を展開した。社会人類学という呼称も、そこから生まれた。彼は、1906年から08年にかけてアンダマン島の実地調査に従事し、『アンダマン島民』(1922)などを著している。彼によれば、社会とは人々の行動が社会関係の定式化された体系によって全体的に統合される様態であり、それは「社会構造」を意味する。社会の

研究は、社会の中で相互に影響しあっている各要素と全体との研究であり、家族関係、法律体系、政治構造、宗教活動、芸術表現、慣行や慣習などが、社会生活全体を継続的に維持する機能に対してどのように貢献しているかを研究するものであると主張した。後のパーソンズ、マートンに代表される「構造—機能主義」理論の原型ともいべき所論を展開したのである。その上で、文化や宗教は人々が秩序ある共同体の社会生活を営むための適応のメカニズムであり、安定した社会構造の維持、存続に貢献する機能をもつと考えた。呪術についても、マリノフスキーと反対に、むしろ不安感や危機感を作りだすものであり、その結果、タブーを尊重する意識を強化するなど、それに対処する態度を生じさせると論じた。それは呪術や宗教儀式の集団内での効果、すなわち社会的機能を重視する考え方であり、結果として危機的状況を通過する集団の一体感を強化したり、集団を安定させることにより、社会の存続をはかる行為であると主張した。

- 7 ミード (George Herbert Mead, 1863-1931) は、アメリカ合衆国マサチューセッツ州に生まれ、父は会衆派の牧師でもあったことから、強いプロテスタントの雰囲気の中で育った。同じ宗教的雰囲気の強いオーバーリン大学に学んだ彼は、むしろ宗教や教会のドグマ性に不満を持つようになり、それと無関係に人間はいかに道徳的に生きることができるかという問題に関心を持ち、卒業後に教師などを経験した後、ハーバード大学にて哲学を学んだ。自我の形成に早くから関心を持ち、ヘーゲルの自由意志論などやデカルトの近代的自我論にも満足できず、やがて心理学に興味を覚えてドイツのヴントのもとへ留学する。

帰国した彼は、ミシガン大学の心理学講師となるが、そこでクーリーらと出会い、やがて新しく設立されたシカゴ大学に移って、いわゆるシカゴ学派の有力な一員となる。第一次世界大戦 (1914) 後のシカゴ大学は社会科学の発展にとって極めて重要な意味を持っている。その中核をなしたシカゴ学派の人々と潮流を概観すると、哲学では「プラグマティズム」を提唱したパース (Charles Sanders Pierce; 1839-1914) やジェームズ (William James; 1842-1910) の後を継いだデューイ (John Dewey; 1859-1952) がおり、社会行動主義の立場から社会的自我の形成を明らかにしたミードがいた。また社会学ではクーリー (Charles Horton Cooley; 1864-1929)、トマス (William Isaac Thomas; 1863-1947) らが中心となって学際的方法である象徴的相互作用論を提唱したが、その理論に基づいて「生活史 (life history) 法」という自伝 (生活史) とドキュメント (手紙、新聞記事、裁判記録等) を素材に、複雑に変動しつつある文明社会での個人の社会生活を、主観的要因と客観的要因との相互作用を観察し分析する研究方法を生み出した。その成果が、トマスとズナニエッキ (Florian Znaniecki; 1882-1958) の共著となる『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』(1918-20, 全5巻。抄訳 (桜井厚訳) 『生活史の社会学』お茶の水書房) である。社会学ではほかにパークやバージェス、マッケンジーなども活躍し、経済学ではヴェブレン、ミッチェル、コモンスなどが、政治行動の研究ではメリアム

(Charles E. Merriam, 1874-1953) などがいて、大規模な学際研究集団を構成し、シカゴ大学は、その後のアメリカ社会科学の中心地となっていった。

第二次大戦もアメリカの学問界にも大きな影響を及ぼし、ルース・ベネディクトなどの国民性研究が展開したが、それにとどまらず、いわゆる「行動科学」の誕生をも促した。プラグマティズムから発生した機能主義に基づく行動理論が社会学や心理学を中心に広がっていったが、それは個人主義の立場と結び付いて、個人の社会環境に対する「適応」という行動に関心が集中してくる。そして1940年代末に、J. G. ミラー (James Grier Miller; 1916-) を中心とするシカゴ大学のグループが、人間の行動を解明するためには生物科学と社会科学とを総合しなければならないと主張して「行動科学」(Behavioral Science) という言葉を初めて使ったのである。1950年からはフォード財団の援助による「行動科学計画」が開始され、人間行動を扱うあらゆる領域の研究者が学際的にかわり、現実的な問題解決をめざすこの新しい科学は急速に広まっていった。

- 8 幼少の頃の…ごっこ遊びなどで、子供は親や兄弟の役割や声音を恐ろしいほどそっくりに演ずるが、これは他者の役割を取得して、自分のものにしていく過程であり、他者の役割を演じることで、他者と自分との関係を把握し、また自分のあり方を学んでいく。この役割取得と自我の形成の関係をもミードは重視した。また、自己形成に影響を及ぼす他者を、「一般化された他者」(generalized other) と「重要な他者」(significant other) として区別したことは周知の通りである。前者は、自分を取り巻く複数の他者とそれらの関係性やルールの全体、総体としての社会を、後者は、成長のある段階で自分の自我の形成に決定的な影響を及ぼした人物や思想、文献などをさす。
- 9 カッシーラー (Ernst Cassirer, 1874-1945) は、プレスラウ (現ポーランド) に生まれたユダヤ系のドイツ人哲学者。新カント派のH. コーヘンに学び、マールブルグ学派の一員として研究生活を始める。近代哲学と科学との関係を歴史的・論理的に考察した『近代の哲学と科学における認識の問題』(1906-20) で広く知られるようになったが、その後、民族学・言語学・比較神話学・比較宗教学の膨大な資料に触れ、カント主義の枠組みを脱して、文化の体系的哲学である『シンボル形式の哲学』(1925-29) を著す。1929年にはハンブルグ大学の学長に就任したが、33年のナチスの台頭によって亡命を余儀なくされ、イギリスのオックスフォード大学オールソールズ・カレッジのフェローを経て、スウェーデン、アメリカへと渡り、活躍する。

図4 ネアンデルタール人の分布 (カヴァーリスフォルツァ, 2000:104)

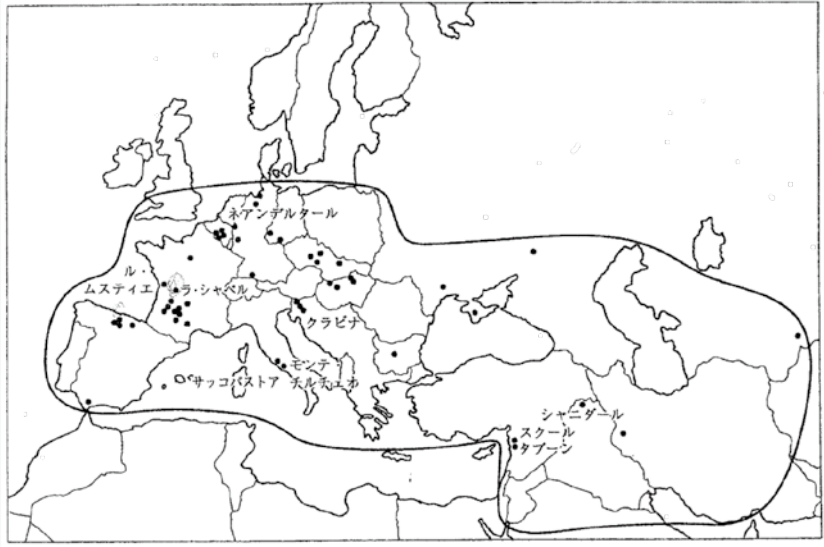
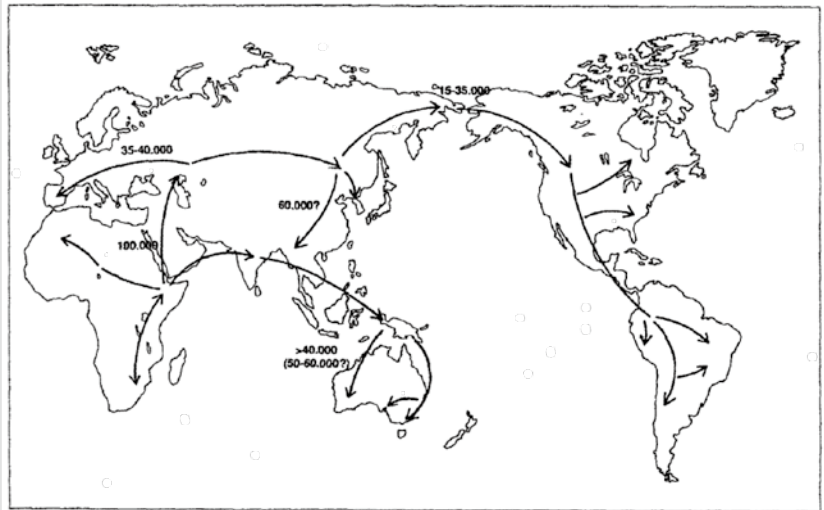


図5 現生人類 (ホモ・サピエンス) の拡散 (カヴァーリスフォルツァ, 2000:216)



《参考文献》

〈哲学・社会学・一般〉

- カッシーラー, E., 1997年『人間』岩波文庫 (Cassirer, Ernst, 1944, *An Essay on Man: An Introduction to a philosophy of Human Culture*, Yale University Press.)。
- カッシーラー, E., 1985年『象徴・神話・文化』ミネルヴァ書房。
- カッシーラー, エルンスト, 1999年『シンボル・技術・言語』法政大学出版局。
- ゲーレン, アルノルト, 1999年『人間学の探求』紀伊國屋書店, 復刊版(1970年邦訳初版) (Gehlen, Arnold, 1961, *Anthropologische Forshung zur Selbstbegeugung und Selbstentdeckung des Menschen.*)。
- ゲーレン, アルノルト, 2008年『人間—その性質と世界の中の位置』世界思想社 (Gehlen, Arnold, 1940, *Der Mensch; seine Natur und seine Stellung in der Welt*, 7 Aufl. 1962)。
- 中野 毅, 2010年「研究ノート: 日本の大学における人間学—現代人間学考1」『創価大学人間学論集』
- バーガー, ピーター L., 1995年『社会学への招待』新思素社 (Berger, Peter L., 1963, *Invitation to Sociology: A Humanistic Perspective*, Doubleday Anchor Books.)。
- 橋爪大三郎, 1988年『はじめての構造主義』講談社現代新書。
- マーチンデール, D., 1974年『現代社会学の系譜』未来社。
- ミード, G. H., 1973年『精神・自我・社会』青木書店 (Mead, George Herbert, 1934, *Mind, Self, and Society; from the Standpoint of a Social Behaviorist*, edited and with an introduction by Charles W. Morris, The University of Chicago Press)。
- ミード, G. H., 1991年『社会的自我』恒星社厚生閣。
- Morris, Brian, 1987, *Anthropological Studies of Religion*, Cambridge.
- ランガー, S. K., 1975年『シンボルの哲学』岩波現代叢書。

〈人類学・考古学関連〉

- 赤澤威, 2000年『ネアンデルタール・ミッション』岩波書店。
- カヴァーリョスフォルツァ, ルーカ & フランチェスカ, 1995年『わたしは誰, どこから来たの—進化にみるヒトの違いの物語』三田出版会。
- ギアツ, C., 1987年『文化の解釈学』I, II, 岩波選書。
- クラックホーン, C., 1971年『文化人類学の世界—人間の鏡』講談社現代新書 255。
- 篠田謙一, 2007年『日本人になった祖先たち—DNAから解明するその多元的構造』NHK ブックス 1078。
- シング, J. A. L., 1976年『狼に育てられた子—カマラとアマラの養育日記』福村出版。
- スタンフォード, クレイグ B. 2001年『狩りをするサル』青土社。
- ディーコン, テレンス W. 1999年『ヒトはいかにして人となったか』新曜社。
- 福井・赤坂・大塚著, 1999年『世界の歴史 24・アフリカの民族と社会』中央公論社。
- ブラウン, ドナルド E., 2002年『ヒューマン・ユニヴァーサルズ—文化相対主義から

普遍性の認識へ』新曜社。

フェイガン, B., 1990年『アメリカの起源—人類の遙かな旅路』どうぶつ社。

マクリーン, C., 1984年『ウルフ・チャイルド—カマラとアマラの物語』福村出版。

マリノフスキー, B.K., 1958年『文化の科学的理論』岩波書店 (邦訳初刷1944年)

(Malinowski, Bronislaw, 1963, *A Scientific Theory of Culture and Other Essays*, New York; A Galaxy Book: Oxford University Press. 1st published in 1944)。

三井誠, 2005年『人類進化の700万年』講談社現代新書。

モーガン, エレイン, 1997年『女の由来—もう一つの人類起源論』どうぶつ社。

モーガン, エレイン, 1999年『人類の起源論争—アクア説はなぜ異端か』どうぶつ社。

モーガン, エレイン, 1999年『進化の傷あと—身体が語る人類の起源』どうぶつ社。

モリス, デズモンド, 1996年『舞い上がったサル』飛鳥新社。

リーチ, E., 1981年『文化とコミュニケーション—構造人類学入門』紀伊國屋書店。

リーチ, E., 1991年『社会人類学案内』岩波・同時代ライブラリー 65。

〈言語学・認知科学・脳科学関連〉

大野 晋, 1994年『日本語の起源』岩波新書 340。

大津由起雄・他, 2002年『言語学入門』研究者。

ガザニガ, マイケル S., 2010年『人間らしさとは何か』インターシフト。

コーバリス, マイケル, 2008年『言葉は身振りから進化した』勁草書房。

酒井邦嘉, 2002年『言語の脳科学—脳はどのようにことばを生みだすか』中公新書 1647。

ソシュール, フェルディナン・ド, 1972年『一般言語学講義』岩波書店。

チョムスキー, ノーム, 1999年『言語と思考』松柏社。

チョムスキー, ノーム, 2003年『生成文法の企て』岩波書店。

ディクソン, R. M. W., 2001年『言語の興亡』岩波新書 737。

ニューバーグ, A. 他, 2003年『脳はいかにして〈神〉を見るか』PHP研究所。

信原幸弘, 1999年『心の現代哲学』勁草書房。

前野隆司, 2004年『脳はなぜ「心」を作ったのか』筑摩書房。

前野隆司, 2007年『脳の中の「私」はなぜ見つからないのか?』技術評論社。

茂木健一郎, 2001年『心を生みだす脳のシステム』NHKブックス 931。

茂木健一郎, 2003年『意識とはなにか—〈私〉を生成する脳』ちくま新書 434。

茂木健一郎, 2007年『脳と仮想』新潮文庫。

